

平成17年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ウマヅラハギ

学名 *Thamnaconus modestus*

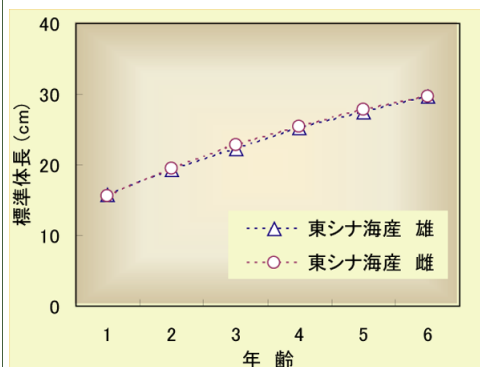
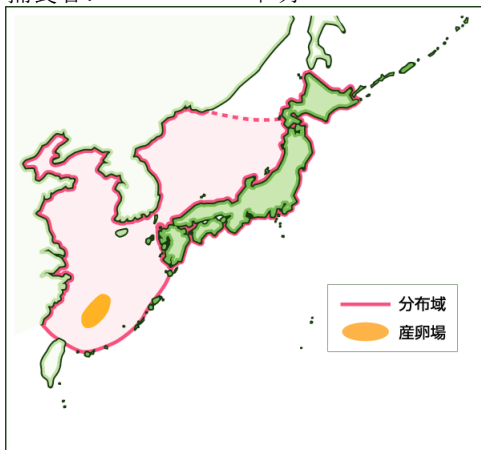
系群名 日本海・東シナ海系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 10歳
成熟開始年齢: 1歳
産卵期・産卵場: 5～7月、魚釣島周辺海域、日本・中国・韓国の沿岸
索餌期・索餌場: 8月～翌4月、東シナ海・日本海の沖合域、日本・中国・韓国の沿岸
食性: カイアシ類、ヒドロ虫類、端脚類、オキアミ類、珪藻類、紅藻類
捕食者: 不明

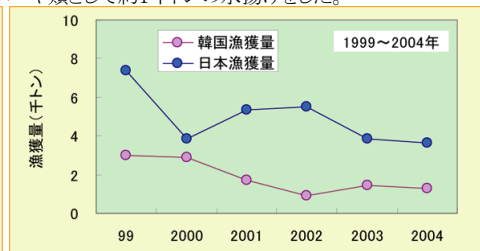
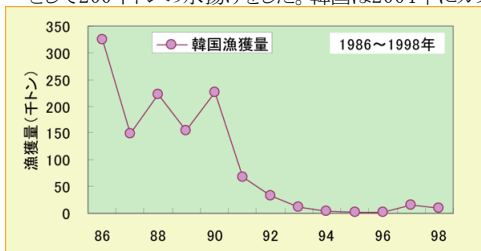


漁業の特徴

主に我が国の沿岸域で定置網やごち網等によって多獲される。盛漁期は冬季。

漁獲の動向

1960年代後半から各地に多量に出現するようになった。2004年の我が国沿岸域(九州西岸～日本海北部沿岸)と東シナ海での漁獲量は5千トン程度と推定される。周辺国では、1980年代には東シナ海において中国と韓国の底びき網漁業等により年間約500千トンの漁獲があったが、その後急速に落ち込んだ。中国は2001年にウマヅラハギ属魚類として200千トンの水揚げをした。韓国は2004年にカワハギ類として約1千トンの水揚げをした。



資源評価法

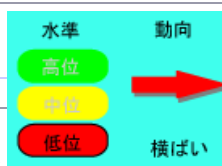
我が国のウマヅラハギの漁獲統計は沖合・沿岸漁業ともほとんど整備されていないため、韓国のウマヅラハギの漁獲量の経年変化から資源水準を判断した。また、1998～2005年の冬季の調査船調査結果及び1998～2004年の沿岸漁業の漁獲量から動向を判断した。

資源状態

1990年以降、韓国の漁獲量が極めて低水準で推移していることから、資源は低水準にあると考えられる。1998～2005年の調査船調査による現存量推定値は横ばいであり、日本沿岸の漁獲量も横ばいであることから、総合的に横ばいと判断した。

管理方策

近年の我が国の漁獲の主体は、秋～冬季に沿岸域で漁獲されているものである。その漁獲量の7割程度が他海域からの来遊群と考えられる。従って漁獲は概ね現状の水準を維持してよいと判断した。ただし、その一部が我が国沿岸での再生産に加わる可能性は否定できないので、やや漁獲量を削減すべきと判断した。



	2006年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	5,200トン	0.9Cave3-yr	-	-
ABCTarget	4,200トン	0.8・0.9Cave3-yr	-	-

資源評価のまとめ

- 我が国では1960年代に大発生したが、その後の漁獲は極めて低水準で推移
- 韓国では1980年代に漁獲量が多かったが、1990年以降極めて低水準
- 調査船調査による現存量推定値は近年横ばい

管理方策のまとめ

- 我が国沿岸域で産卵する親魚をある程度確保し、資源の回復を図る

資源評価は毎年更新されます。
2005.12.8更新